

三重大学における日韓共同理工系学部 留学生事業の現状と今後の課題

福岡 昌子

The Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students at Mie University: Current Status and Future Challenges

FUKUOKA Masako

〈Abstract〉

Mie University has accepted a total of nine Korean students (as of December 2006) under the Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students since its commencement in the year 2000. In July 2006, a conference of the Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students was held at Kanazawa University. At this conference, the Higher Education Bureau (the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) announced that it plans to continue to promote the program after 2010.

This paper reports the current status of the Japan-Korea Joint Exchange Program for Science and Engineering Students at Mie University. Further, this paper discusses future challenges and required clarifications concerning acceptance of Korean students into the university and appropriate teaching methods for these students.

キーワード：日韓理工系学部留学生事業、日本語教育、留学生、三重大学、アンケート

1. はじめに

日韓理工系学部留学生事業は、1998年10月の日韓両国首脳による日韓共同宣言に基づき、「韓国の企業・研究所等における先端技術の更なる高度化の促進を図るため、次代を担う前途有為な学生（高等学校卒業者）を日本の理工系大学（学部・4年制）へ招致し、最先端技術・知識を習得するとともに、留学生交流を通じた日韓間の相互理解の増進に寄与する」⁽¹⁾ことを目的としている。本事業では両国折半による経費に基づき実施され、2000年から2010年まで日本の大学の理工系学部 に在籍する韓国人留学生が1000人に達することを目標に始められた。日韓共同理工系学部留学生（以下、日韓生とする）は日本留学に必要な日本語教育を中心とする一年間の予備教育を受講し、前半期（6ヶ月）を韓国内で、

後半期（6ヶ月）は、配置される日本の理工系学部を有する大学において専門を学ぶ。

三重大学では、2000年10月より日韓生の第1期生2名を受け入れて以来、第2期生4名、第5期生1名、第6期生2名の合計9名の日韓生の受け入れを行ってきた。現在第1期生2名は卒業し（1名は中途退学）、第2期生4名の内1名が卒業、2名が本学大学院、1名が他大学大学院に進み、第5期生は2学年、第6期生は1学年に進んでいる。受け入れ数は少ないものの、予備教育、学部との連携という点では本事業は着実に展開している。

今年2006年7月、日韓共同理工系学部留学生協議会（於：金沢大学）において、文部科学省より2010年以降も本事業を継続していく方針であることの報告があった。そこで、本稿では、三重大学における日韓共同理工系学部留学生事業の現状について、日韓生、予備教育を担当する日本語教員及び専門基礎教育の担当教員、学部（工学部）入学後の学年担当および主にゼミ指導教員を対象にアンケート⁽²⁾を実施し、その報告を行う。受け入れ、指導など、本事業における本学の問題点を整理し、今後の課題について見解をまとめたい。

2. 予備教育における日本語教育と専門基礎教育、学部入学後の主な指導体制

2. 1 予備教育：日本語教育

国際交流センターでは、第1期生の受け入れ時より渡日後に日本語レベル判定試験を実施し、日韓生の日本語レベルに応じた日本語のクラスでの日本語教育が行なわれている。これまで、5名が中級Ⅰレベル、3名が中級Ⅱレベル、1名が上級レベルに配属された。近年の学生ほど日本語レベルの高いクラスへの配属がある。日韓生対象の一般日本語教育コースの開講科目は表1の通りである。第1、2期生の頃は渡日が遅く、特別補習講座を必修として受講を義務づけた時期もあったが、第5期生以降は支障なく各コースの授業を

表1. 中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級コースの開講科目

	開講時間数	必修科目		選択科目
中級Ⅰ	240時間	「文法・読解 ab」 「文法・読解 cd」 「語彙・表現」	「作文Ⅰ」 「聴解Ⅰ」 「異文化理解・適応」	「聴解・会話」 「読解・漢字 1ab」 「読解・漢字 2」
中級Ⅱ	180時間	「文法Ⅰ」 「文法Ⅱ」 「読解」 「聴解Ⅱ」	「作文Ⅱ」 「日本事情Ⅰ」 「異文化理解・適応」	「読解・漢字 2」
上級	90時間	「読解・作文」 「聴解Ⅲ」	「日本事情Ⅱ」 「異文化理解・適応」	

受講することができている。予備教育時期において日韓生の修学や生活に関する指導については、本事業の国際交流センターの本事業担当教員が中心に行なっている。筆者は2003年度より本事業を担当している。

2-2. 予備教育：専門基礎教育（数学、物理、化学）

専門基礎教育の各教科の内容は、高校レベルの基礎知識の復習を基本とし、特に既習項目を日本語により理解するところに重点が置かれている。第1期生の受け入れ時より、基本的に高校での指導経験のある非常勤講師⁽³⁾により数学、物理、化学の3科目の指導が行われてきた。主要教材は、第1期生より現在に至るまで国際学友会日本語学校の『進学する人のための数学（1）（2）』、『進学する人のための物理』、『進学する人のための化学』を中心に進めている。第5、6期生より、期末試験時に国立大学センター共通一次試験の過去の問題を一部加えた試験を行なっているが、全員合格点が取れている。また、数学においては記述式解答に慣れるための指導や、物理や化学においては演習の指導を中心とし、時には実験を通して専門基礎教育の指導も行われている。同じく第5期生以降、予備教育時期において人文学部や教育学部の協力により、第1、2期生の要望が大きかったネイティブ講師による英会話の聴講も行われている。

2-3. 学部入学後の日韓生に対する主な指導体制

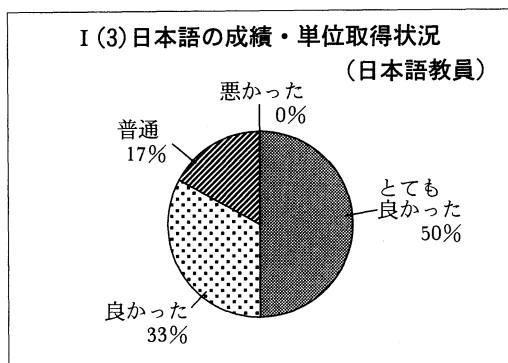
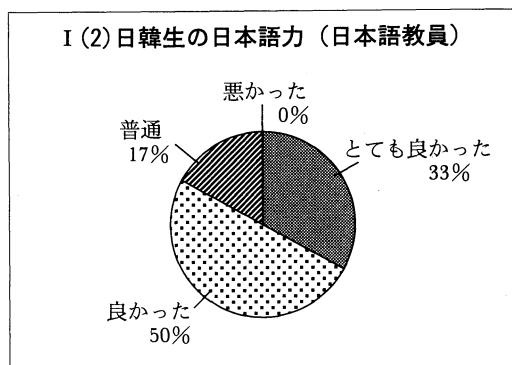
日韓生は現在のところ全員が工学部に進学し、学部入学後は、一般学生と変わらない指導が行われている。本学の工学部では、情報工学科を除き、機械工学科1名、電気電子工学科3名、分子素材工学科1名、建築学科3名、物理工学科1名の日韓生の受け入れがあった。工学部では1年生より3年生まで各学年に対して学年担当の教員が2名ずつつき、4年になってはじめて研究室に入り、指導教員2～3名が指導を行う。学科によっては、学部1年の前期に、基礎教育科目として「入門物理学演習」「入門数学演習」を必修科目としたり、また、入学後プレースメントテストを行ない、結果によって受講を義務づけている学科もある。総じて、本学の工学部における教員の指導体制、大学院生のTA体制は充実しており、インターンシップ・プログラム、進学や就職指導なども行なっていて就職率も高い。工学部入学以降は、留学生委員会⁽⁴⁾の工学部代表委員が、国際交流センターの本事業の担当教員と連携を取りながら、本事業の広報や日韓生への指導を行っている。なお、本学の生物資源学部の資源循環学科や共生環境学科も日韓生の受け入れ可能学科であるが、一般韓国留学生の受け入れはあるものの、現在日韓生の受け入れはないため、積極的に広報活動を行なっている状況にある。

3. アンケート調査結果

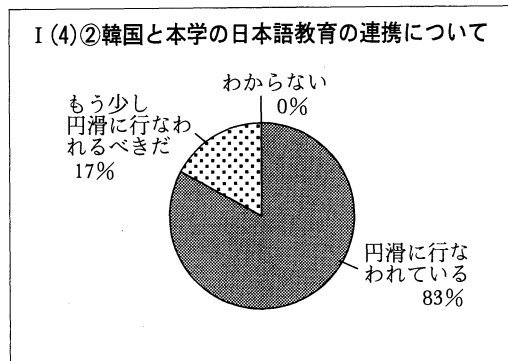
3-1. 予備教育：日本語教員

日本語教員は、第1, 2期生を担当した教員と第5, 6期生を担当した教員とでは、担当時期の違いもあるため、非常勤講師を含む計6名の回答結果からまとめた。以下、図中の数字はアンケートの質問番号である。

「日韓生の全体的な印象」はよく、「とてもよい」33%、「よい」50%、「普通」17%であった。「日韓生の受け入れ時の日本語力（図I(2)）」については、「とてもよい」33%、「よい」50%、「普通」17%で、他の留学生と一緒に指導している日本語教員から見れば、日韓生は比較的高い日本語のレベルに位置していると見ている。また、「日本語の成績や単位取得状況（図I(3)）」を見ても、「とてもよかった」50%、「よかった」33%、「普通」17%と、授業も熱心に受講している様子がわかる。



また、「予備教育時期における日本語教育の連携」（図I(4)②）という点について、国際交流センターで実施している日本語レベル判定試験のクラス分け状況や日本語の指導状況から見て、韓国と本学の日本語教育面における連携は「円滑に行われている」（83%）と判断されている。



大学入学前の半年間の予備教育において、今後も日本語の指導が必要であるかという質問に対しては、「今後も必要である」が83%となっており、今後も継続して予備教育時期における日本語の指導が必要であると考えられている。同様に、日本語教員から見た専門基礎教育の指導についても、「専門基礎教育の中で使われている日本語には、授業では扱わない内容の日本語が含まれているため、今

後も継続が必要である」が50%を占めていた。

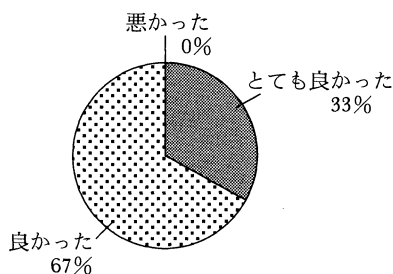
総じて、日本語教員から見て、日韓生は熱心に勉強し、漢字を苦手とする学生もいるが、文法や語彙面での定着率は非常に高く、「このような優秀な学生が日本の理工系大学へ来て学ぶことは、日韓両国にとって有意義である」との見解を抱いて指導している日本語教員も多い。

3-2. 予備教育：専門基礎教育の担当教員

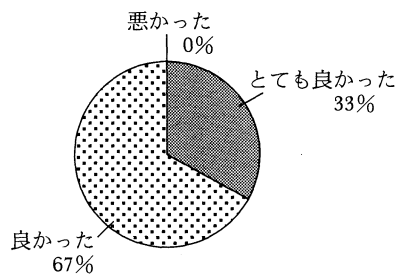
これまで予備教育において「数学」「物理」「化学」の指導を担当した専門基礎教育の担当教員の回答結果（3名）を示す。主に第5期と第6期の学生の指導にあたった。

日本語教員と同様に、日韓生の印象はよく、「日本語力」（図Ⅱ（4））や「専門基礎教育の理解」（図Ⅱ（5））もとてもよい。専門用語でわからないものもあったが、問題文も正しく理解でき、大学での授業を受講する際には支障がないと判断されている。ただし、「数学など記述式の解答方法や数学独特の日本語（かつ、または、ある～、すべての～）」については、指導の必要性がある」。また、予備教育における専門基礎教育の指導では、「韓国の高校でのコースによって受講していない分野があったり、同じ数学の記号でも省略されているものが異なっている場合がある」ので、今後も大学での授業への橋渡しとして補講が必要であるという見解を得ることができた。

Ⅱ（4）日本語力（専門科目教員）



Ⅱ（5）専門科目の理解力（専門科目教員）

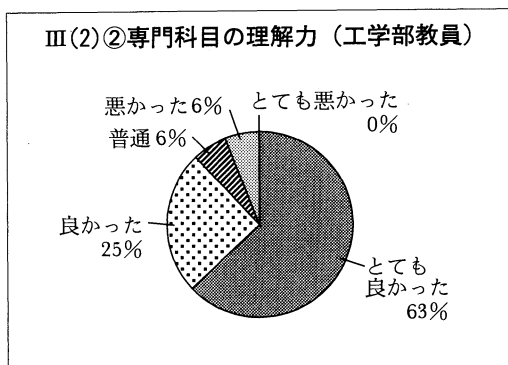
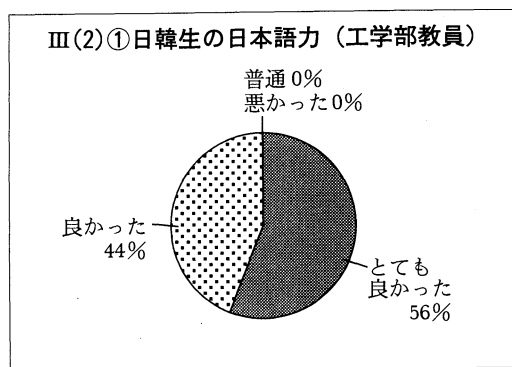


3-3. 工学部教員

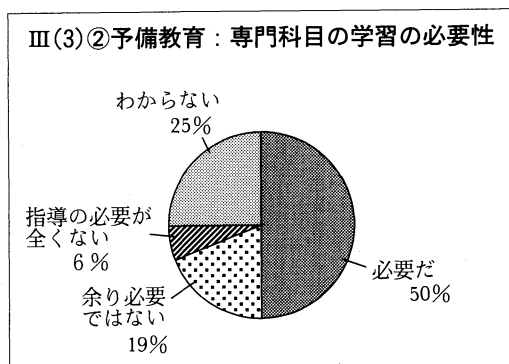
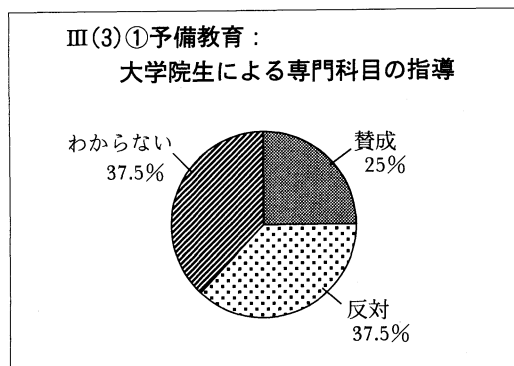
工学部の教員には、学年担当および4年次の指導教員として関わった19名の教員にアンケートを依頼し、16名の回答を得た。

工学部の教員から見た日韓生は、まじめで優秀であり、何事にも前向きであり、卒業研究も集中して取り組み、良い成果を出している。さらに、ゼミの日本人学生との関係もよく、日本人学生の中にうまく溶け込んでいるという印象が持たれている。日本語力、専門科目の理解力も高く、成績や単位取得状況も良好であり、成績は日本人学生を含めた中で

上位に位置している。なお、本学の学年担当を除いた4年次の担当教員や大学院における指導教員は、卒業研究、研究内容について、2、3日または1週間に一度は定期的な指導を行なっていて、修学・生活面についてはほぼ把握している状況がうかがわれた。



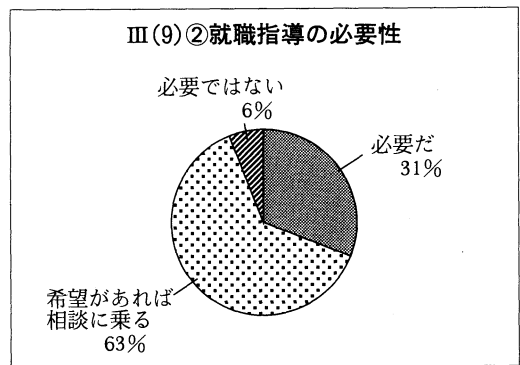
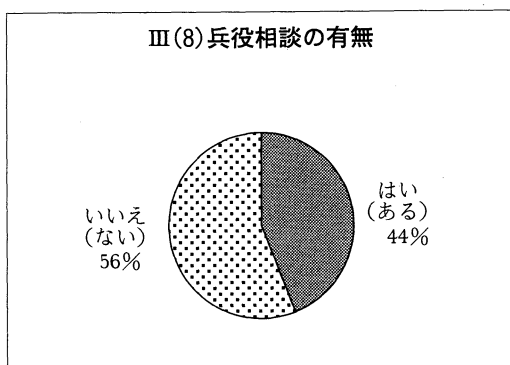
国際交流センターでは、3-2で述べたように、予備教育時期における専門基礎科目については、現在（元）高校在職の教師を非常勤講師として雇用して指導を行なっているが、安龍沫他（2006）にも指摘されるように、独立行政法人以降は、本学においてもこの専門基礎教育の経費をいかに確保するかが幾度か問題となった⁽⁵⁾。大学院生が指導にあたる他大学の例もあるため、「大学院生に専門基礎教育の指導を依頼すること」（図Ⅲ(3)①）についてアンケート調査を行った。その結果、大学院生による専門基礎教育の指導に「反対」が「賛成」より多かった。「賛成」の理由としては、「TA 経費は必要であるが、高校の復習であれば十分対応可能である」というものだった。一方、「担当大学院生の能力により成果が変化する」、「適任者の選択が難しい」、「多くの博士課程の院生は既に学部で TA を行なっており、これ以上の負担は本人の研究進行の妨げになる」、「独立行政法人になっても必要な経費は cut すべきではない」との「反対」意見が寄せられた。



さらに、今後の予備教育時期における専門基礎科目の学習の必要性について（図Ⅲ(3)②）は、「必要だ」が半数を占めていた。その理由としては、「日本と韓国の指導内容に違いがあるならば今後必要だ」、「数学、物理については、大学入試を経ていないので、演習を十分に行なう必要がある」、「できれば日韓生だけではなく留学生全体に広げて理工系教育を教員が行なうべきだ」との意見もあり、予備教育時期における専門基礎科目の学習は、指導の質を落とすことなく、今後も指導が必要であると考えられている。

ところで、韓国人男子学生の場合、兵役の義務があり、一般韓国人留学生の場合、兵役を済ませてから留学に来る学生が多いが、日韓生の場合高校卒業後に本事業に参加するために、兵役の時期についてがしばしば問題となる。そこで、進路相談の一環として「兵役に関する相談を受けたことがあるか工学部教員に尋ねた。その結果、44%の教員が兵役に関する相談」（図Ⅲ(8)）を受けたとの回答があった。さらに、近年、日本で就職したいという留学生が増加してきており、「就職指導を行なった経験」についても、13%の教員が就職に関する相談を受けていた。また、「就職指導の必要性」（図Ⅲ(9)②）について尋ねたところ、「必要だ」が31%、「希望があれば相談に乗りたい」が63%であった。教員の中には企業から「韓国人学生の紹介」を求める企業があったことを報告し、就職指導の必要性を少なからず抱いている。

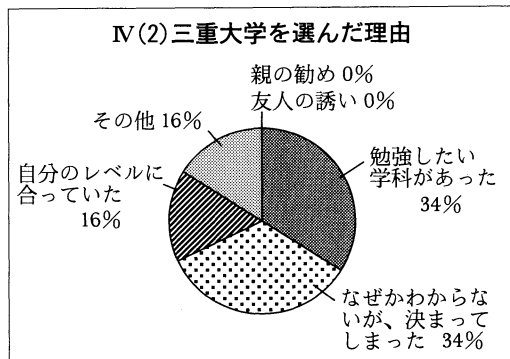
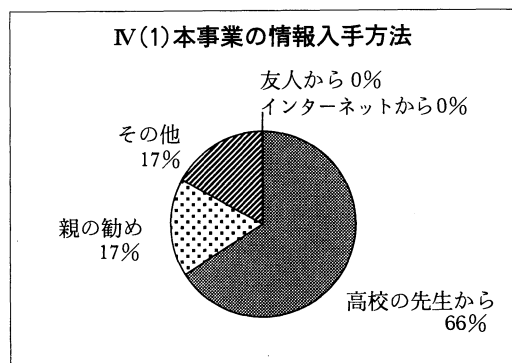
工学部教員にとって、日韓生は日本人学生や他の留学生ほど手がかからず特別な配慮は不要ではあるが、「留学生が卒業までに入れる留学生会館を作るべきであり、日韓生が男子寮に優先的に入れる措置でもよい」、また、「就職」や「兵役」についても考慮すべきだという見解があることを見出すことができた。同時に、アンケート調査を通して、工学部教員の真摯な指導状況やその対応振りを概観することができた。



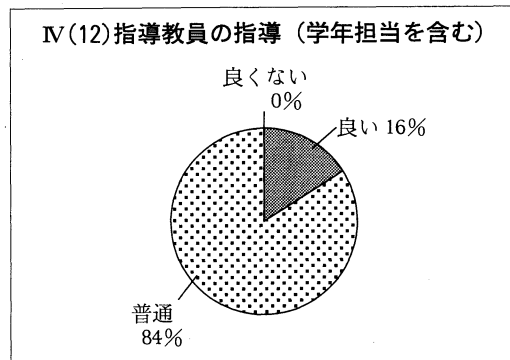
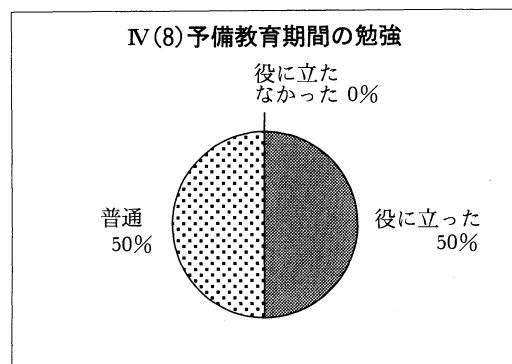
3-4. 日韓生

日韓生へのアンケートは、現在大学院に在学している第2期生2名、学部卒業者1名、学部所属の3名合計6名にアンケートを行い、全員から回答を得た。

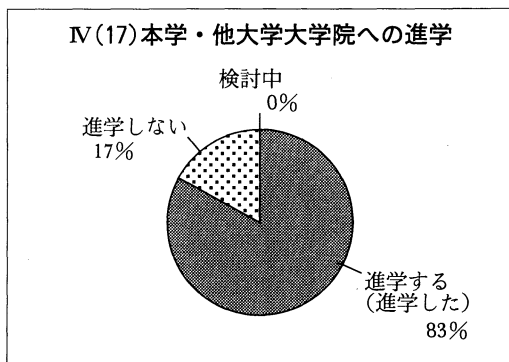
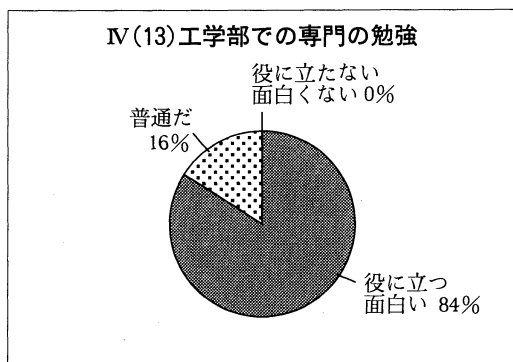
まず、「本事業の情報の入手方法」（図Ⅳ(1)）であるが、韓国の高校の先生からの紹介が多く、両親や先輩からの紹介もあった。「本学を選んだ理由」（図Ⅳ(2)）としては、「勉強したい学科があった」や、「なぜかわからないが決まってしまった」との回答もあった。大学の選定については、現在、本人の希望に沿うように配置が行なわれている。「三重県は日本の中央に位置し、気候が温暖で京都や奈良の古都や名古屋、大阪、東京にも旅行しやすいから」という地理的な理由もあった。



日韓生が渡日した際に、「自分の所属したクラスは適切なレベルであったか」という質問に対しては、全員が適切だったとしている。また、「韓国の予備教育機関から三重大学国際交流センターの予備教育へと移行する過程において、日本語の学習が順調に進めたか否か」の質問に対しては、全員が順調に進めたと回答している。「本学の予備教育期間の日本語や専門基礎科目の勉強」（図Ⅳ(8)）は、概ね役に立ったと回答し、「科目の選択など個人のニーズに合った選択がしたい」、「少人数で受講する専門基礎教育の授業は、負担に感じられるときがあった」との報告もあり、日本語の授業の幅広い選択科目の設置や専門基礎科目の指導体制のあり方など、改善点が見出せた。

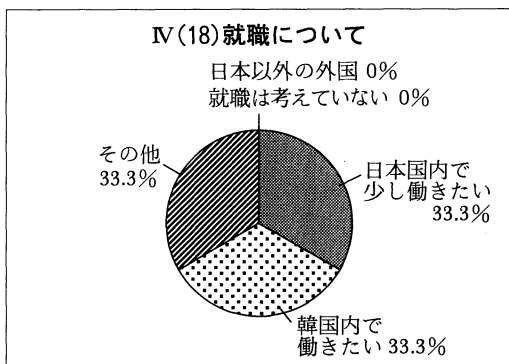
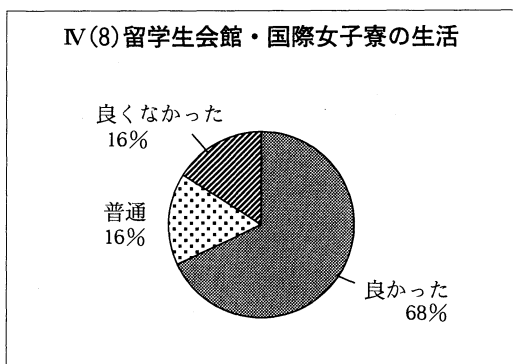


「工学部での専門の勉強について」(図Ⅳ(13))は「役に立つ・面白い」が84%を占め、現在学部で勉強している日韓生全員が、本学や他大学大学院への進学を希望していることがわかった(図Ⅳ(17))。工学部入学以後は、「専門用語が韓国で学習した用語と異なったりして迷ったこともあったが、授業の聴講には支障がなく」、日本語の面では「日本人学生との大学生活の中で、更なる会話学習や速読練習の必要がある」と感じている。



現在、三重大大学の寮は留学生会館、国際女子寮があり、その他学生の自治運営による男子寮がある。日韓生の入寮にあたっての優先順位は高い。特に国際女子寮については、本学に在籍している間は入居することができる。調査時点において留学生会館居住者3名、国際女子寮1名、男子寮1名、民間アパート1名という状況であったが、全員が三重大大学の寮生活を経験しており、「安い」、「いろいろな国の人と話せる機会が得られた」、「基本的な家具が用意されていた」という感想が得られた(図Ⅳ(8))。現在、留学生会館のチューターを務める日韓生もいる。留学生会館の場合は、居住年限は1年であるため、アパート探しが大変だったという2期生の感想もあった。

「就職について」(図Ⅳ(18))は、その就職先として日本国内 33.3%、韓国国内 33.3%



%と半々であり、他国も視野に入れている者もいる。その就職情報の入手先については、「インターネット」、「指導教員」、「韓国政府からの日韓プログラム参加者向け就職情報」を挙げており、指導教員からの情報や韓国政府からの日韓プログラム参加者向け就職情報を期待していることがわかる。

「兵役の時期について」は、学部生の場合は「まずは大学院に行ってから」と考えており、大学院生は「大学・大学院卒業後」や「博士課程前期が修了した時期に休学して」と考えており、目前に迫っている問題でもあり、現在の心配ごとであることもわかった。本事業については、「4年間国費で日本へ留学できるので、本当にいいプログラムであると思う」、「多くの友人を得ることができた」、「日韓の架け橋となって活躍したい」と述べていた。また、当初の予定とは違って2010年以降も本事業が続けられることに対しては、もし続けられるならば改善点として、「兵役の問題の解決」、「韓国国内でも多くの学生に本事業の存在を知らせてほしい」、「学部を卒業してからのインターンシップ・プログラムなどの連携プログラムがあってほしい」など、「兵役」や「就職」に関連する改善点を挙げていた。

4. 三重大学における本事業の課題

4-1. 予備教育

本学における予備教育は、アンケートの結果から、日本語の授業や、数学、物理、化学などの専門基礎科目も、韓国国内での予備教育から順調に連携が行なわれており、さらに、学部入学後への橋渡しも円滑に行われていることがわかった。

独立行政法人化後の財政面の厳しい中、予備教育における専門基礎科目の指導のあり方については、懸念されていたように博士課程大学院生による指導は、工学部教員からは望ましくないという声が多かった。担当大学院生の能力により成果が変化することが考えられ、指導する大学院生本人の研究進行の妨げにもなるとのことだった。現在、工学部の学科によっては、学部1年の前期に、基礎教育科目として「入門物理学演習」「入門数学演習」が必修科目または自由科目として行っている学科もある。しかし、日韓生の場合、既習項目を日本語により理解するところに重点が置かれ、専門用語も韓国で学習した用語と異なっている点もあるので、今後も予備教育における専門基礎教育の指導のための予算を確保し、大学入学後の受講に支障がないように継続して行うべきであることは、日本語教員や工学部教員からも一致した意見であった。国際交流センターで行う専門基礎科目は、日韓生だけではなくマレーシア政府派遣留学生など理工系留学生一般への開放も可能であるため、日本語の授業と同様に多くの留学生が国際交流センターへ来て学ぶことが期待さ

れる。

予備教育のあり方については、本事業の当初から多くの大学が模索してきたところであるが、日韓双方の予備教育機関の連携強化を図りつつ、受け入れ大学の努力の工夫によって今後も学部へと橋渡しさがさらに円滑に行われていくのではないと思われる。

4-2. 受け入れ

第1, 2期生の受け入れ時と比較すると、日韓推進留学フェアへの参加、国際交流センターにおけるHPやパンフレットの充実、不定期であるが担当者や先輩による在韩国日韓生への訪問、日韓生に関する学部と国際交流センターとの協力体制から鑑みても、非常に多くの点で改善されてきた。また、本学は受け入れ人数が少なく目が行き届くこともあってか、日韓生はまとまりも強く後輩への面倒もよい。学部や大学院での修学上や生活上の問題も多くはない。しかし、工学部教員の回答にもあったように、留学生が卒業まで入居できる留学生会館の設立や、また、奨学金の整備、機関保証の問題など、大学全体で改善を図っていく課題は多く、解決が急がれる。日韓生ばかりでなく、留学生全員が本学で過ごす貴重な時間をさらに有意義なものとし、快適な留学生活が送れるよう、一つ一つ着実に改善していく必要がある。

4-3. 進学、就職、兵役問題

日韓生の進学、就職を考えていく場合、兵役問題がどうしても関係してくるのは避けられない。兵役の問題は内政干渉的な問題であり、本事業に参加した時点で、日韓生も承知の事であるため、本人の判断に委ねられるところが大きい。韓国では高校卒業時点や大学2年を終えた20歳前後で入隊することが多いと聞くと、本事業は学部生で休学した場合でも奨学金が支給されるなどの点からも本質的に休学が許されないシステムになっており、兵役制度に関しては十分に考慮されていない面がある。本学の例を挙げれば、昨年度の本学の学生で将来は日本国内で就職を希望していた学生が、兵役の時期の問題で勉学に集中できなくなり、卒業が遅れ、大学院進学を断念した問題が生じた。他の学生も現在の不安な点について、大学院で研究を続けていく上での兵役の時期を挙げていたことから、男子学生には兵役問題が深刻な問題であることが理解される。

この経緯から、他大学の状況を知るために、2006年9月の日韓プログラム推進大学フェア（於：国際教育振興院（ソウル））の参加大学に、主に大学・大学院の休学期間⁶⁾、休学して兵役に行った学生の有無、兵役問題に悩む日韓生へのアドバイス内容について尋ねた。参加校の35校のうち28校から回答があった。実際に一般の韓国人留学生を除き休学して兵役に行った日韓生はいなかった。兵役問題に悩む日韓生へのアドバイス内容については、相談を受けたことがないとする大学が68%を占め、大学によっては、第1, 2期生

を受け入れていなかったり、大学院に進学する学生が多かったりで、兵役の問題については先送りされている感がある。残りの大学は1期生から受け入れが多かった大学であり、「個人の判断に委ねる」、「大学院進学を勧める」、「修士終了後に兵役につく」、「大学院終了後、専門性を生かし兵役と同等の勤務をする」、「兵役を考慮してくれる企業を探す」、「兵役について大学の会議で議論にはなっているが、余り有効なアドバイスはできていない」、「理系の場合学習が中断すると学生にとってハンディになると心配するが、適切なアドバイスはできていない」という率直な意見も聞くことができた。

本学では、2006年度において幾つかの委員会で「韓国人男子留学生の兵役問題にかかわる休学期間」⁽⁷⁾の延長を含めた対処について審議された。多くの問題が絡みまだ解決には至っていないが、前向きな検討が行なわれている。日韓生のアンケートの中に、本事業への要望として、「兵役の問題の解決」、「学部を卒業してからのインターンシップ・プログラムなどの連携プログラムがあってほしい」があったように、兵役問題の解決、大学院進学者に対する奨学金支給制度や就職に有利となるような支援体制など、本事業が更に改善されていけば、参加学生にとって益々魅力あるプログラムとなっていくに違いない。今後日本留学試験などを経て、日韓生のように高卒者が日本へ留学するケースも考えられ、日韓双方で解決が難しい問題が横たわっているのであれば、受入れた大学の身近なところから独自の判断の下に、新たに受け入れ体制について検討を行ってもよいのではないだろうか。

5. 最後に

本稿では、三重大学における日韓共同理工系学部留学生事業の現状について報告を行うとともに、問題点を整理することができた。アンケートを通じて、本事業の継続・発展のためには、本学全体が関わっていかなければならない課題、また、本事業の根本的な問題も大きく関係していることがわかった。それが、日韓生の現時点、将来への不安材料となっていることも歪めない。しかし、時として文化交流の担い手として、そして、韓国人としての誇りを抱いて通訳や語学指導など地域に貢献する日韓生の姿を見るにつけ、日韓生の多くが日本で学んだ技術・知識をその人生に生かすばかりでなく、日韓間の相互理解に大きく貢献していくものと信じる。優秀な学生が多く参加する本事業であるだけに、修学に専念し、将来に生かしていけるように本事業担当者として今後も最大限の努力を行なっていきたい。

注

(1) 文部省学術国際局留学生課（1999）「日韓共同理工系学部留学生事業実施計画」『日韓共同理工

系学部留学生の受け入れについて』11 学留第 55 号

- (2) アンケートは、佐藤他（2002）、安龍沫他（2006）、太田（2006）等を参考に作成した。
- (3) 第 1, 2 期生の時期に、化学については本学工学部大学院生による専門基礎教育が行われた時期もあった。
- (4) 本学の留学生委員会では、国際交流センター国際教育部門長、外国人留学生会館主事、各学部又は研究科、国際交流センターの大学教員 2 名、学務部学生サービスチームリーダー、学術情報部国際交流チームリーダーから構成され、外国人留学生の受け入れ、海外派遣、修学及び生活の援助、留学生会館の管理運営、留学生交流に関する事項を審議する。
- (5) 各大学における本事業の予算については、平成 12 年の第 1 期生の際には特別に文部省予算措置が組まれていたが、第 2 期生の際には施策充実経費の中に、また、独立行政法人化以降は、運営費交付金の中に措置されている。
- (6) 休学期間については、学則に基づく回答は得られなかったため、本学工学部教員が大学のホームページ等で調査した結果、大学院の場合休学期間は通算して 2 年を超えることができないという本学と同じ内容の学則を持つ大学がほとんどであったが、幾つかの大学では休学期間がさらに延長できるよう配慮されている大学もあることがわかった。
- (7) 本学の大学における休学に関しては、国立大学法人三重大大学学則第 4 章第 51 条「1. 休学の期間は、1 年以内とする。ただし、特別の事由がある者には、更に 1 年以内の休学を許可することがある。」、また、本学の大学院における休学に関しては、三重大大学大学院学則第 9 章第 30 条に、「1. 休学期間は、1 年以内とする。ただし、特別の理由がある場合は、許可を得て引続き休学することができる。2. 休学期間は、通算して 2 年を超えることができない。」と定められている。

謝辞：お忙しい中、アンケートにご協力くださった 2006 年 9 月の日韓プログラム推進大学フェア（於：国際教育振興院（ソウル））参加大学関係者、また、同年 8 月にアンケート調査を実施した際にご協力くださった本学工学部教員、国際交流センター日本語教員、専門基礎科目担当者、日韓生に感謝申し上げます。

参考文献

- 安龍沫・金重燮・酒匂康裕・趙顯龍（2006）「日本における日韓理工系学部留学背事業の実施状況に関する報告—21 大学を対象に実施したアンケート調査に基づいて—」『茨城大学留学生センター紀要』、77-106.
- 太田亨（2006）「金沢大学における日韓共同理工系学部留学生事業に対する中間評価報告」『金沢大学留学生センター紀要』第 9 号、61-73.
- 小野寺多映子（2006）「日韓共同理工系学部留学生第 8 期生の選抜について他—日韓実務協議会を踏まえて—」『平成 18 年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料（2006. 7. 21.）』金沢大学留学生センター、1-2.
- 金沢大学留学生センター『平成 18 年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料（2006. 7. 21.）』
- 金重燮（2005）「慶熙大学校における 6 期生の予備教育の情况及びプロジェクトについて」『平成 17 年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料（2005. 7. 22）』広島大学留学生センター、1-27.

金重燮 (2006) 「慶熙大学校における7期生の予備教育の現状及び実質的な連携方法に関する一考察」『平成18年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料 (2006. 7. 21.)』金沢大学留学生センター、1-23.

佐藤尚子・案野香子・加藤扶久美 (2002) 「日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラムに関する調査報告ー第1期生に対するプログラムのまとめと第2期生に対する準備状況を中心にー」『千葉大学留学生センター紀要』第8号、23-36.

東京工業大学 (2004) 「日韓共同理工系学部留学生事業における諸問題の検討について (依頼)」日韓共同理工系学部留学生事業協議会

広島大学留学生センター『平成17年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料 (2005. 7. 22)』

文部省学術国際局留学生課 (1999) 「日韓共同理工系学部留学生事業実施計画」『日韓共同理工系学部留学生の受け入れについて』11学留第55号

【参考資料: アンケート (I 日本語教員、II 専門基礎科目担当教員、III 工学部教員、IV 日韓生)】

I. 「日韓共同理工系学部留学生事業による留学生 (日韓生) への指導アンケート (日本語教員)

(0) ①国際交流センターで、日韓生を指導されたことがありますか。②ご指導をされた日韓生がどの期生かご記入いただけますか。③また、ご担当になった科目名をお書きください。

① () 日韓生を指導したことがある () 日韓生を指導したことがない

②日韓生の氏名: (1期生, 2期生, 5期生, 6期生)

③ご担当の科目:

(1) 日韓生の全体的な印象をお書きください。

() とても良い () 良い () 普通 () 悪い () とても悪い () わからない

【感想】

(2) 国際交流センターでは、受入れ初年度時に日韓生に対して、日本語と専門基礎教育の予備教育を行なっておりますが、先生がご指導された時点の日韓生の日本語力はどうか。

日本語力

() とても良かった () 良かった () 普通 () 悪かった () とても悪かった () わからない

【感想】

(3) 国際交流センター予備教育時期における日本語、専門基礎教育の学習について

①受入れ初年度の国際交流センター予備教育時期において、今後も日本語の学習が必要だと思いますか。

() 必要だ () 余り必要ではない () 指導の必要が全くない () わからない

【理由】

②日韓生は、渡日前に半年間韓国で日本語の指導を受けてから、日本へ来ます。国際交流センターの日本語レベル判定試験では、1, 2期生の場合は中級Iレベル、5, 6期生の場合は、中級IIか上級レベルへ配属されることが多いようです。このクラス分け状況や実際にご指導された経験から判断して、日本語指導面における韓国と日本の連携は円滑に行われていると思いますか。

() 円滑に行われていると思う

() あまり円滑に行われていない

【理由】

- ③化学、物理、数学の専門基礎教育については、工学部入学前、即ち、受入れ初年度に、国際交流センターから現在（元）高校在職の先生にお願いして非常勤講師となっていて、「高校の復習」を中心にご指導をいただいています。独立行政法人以降その経費等が問題となっておりますが、博士課程の工学部の大学院生に、予備教育の指導を依頼することについては、どう思われますか。（センターで日本語の指導をされている先生は、工学系学生のための指導という点から、お答えください。）

☐ 賛成 ☐ 反対 ☐ わからない

【理由】

- ④受入れ初年度の国際交流センター予備教育時期において、今後も専門基礎教育の学習が必要だと思えますか。（センターで日本語の指導をされている先生は、工学系学生のための指導という点から、お答えください。）

☐ 必要だ ☐ 余り必要ではない ☐ 指導の必要が全くない ☐ わからない

【理由】

- ⑤日韓生の1,2期生の要望もあって、5期生（2004年）以降、国際交流センターの予備教育時期から、人文学部と教育学部のご協力によって、日韓生が両学部のネイティブの外国人教師に英会話の授業を聴講させていただいていることをご存知ですか。

☐ 知っている ☐ 知らない

- (4) 受け持たれている科目から見た日韓生の日本語の成績、単位取得状況は、どうでしたか。

☐ とても良かった ☐ 良かった ☐ 普通 ☐ 悪かった ☐ とても悪かった ☐ わからない

【感想】

- (5) 日韓生の学習面では、どのような点が印象に残りましたか。
- (6) 日韓生への日本語の指導では、特にどのような点に、今後も注意・配慮すべきだと思いますか。
- (7) ①日韓生の生活面では、どのような点が印象に残りましたか。
- ②これまで、アパートを借りる際の「保証人」になっていただけないか、という相談を受けられたことがありますか。☐ はい ☐ いいえ
- (8) 「日韓共同理工系学部留学生プログラム」へのご意見・ご質問・ご要望がありましたら、ご記入ください。
- (9) このプログラムに関連して、国際交流センターに対する要望（日本語指導、生活指導、その他）がありましたら、お書きください。また、その他、お気づきの点も、ご記入願います。

*ご協力ありがとうございました。

Ⅱ. 日韓共同理工系学部留学生事業：「国際交流センター予備教育における専門基礎科目」の指導アンケート

- (1) 専門基礎科目の指導を実際に行なった学年に、○をつけてください。

第1期生（00年10月～01年3月）：

第2期生（01年10月～02年3月）：

第5期生（04年10月～05年3月）：

第6期生（05年10月～06年3月）：

- (2) 指導を行なった時点における指導内容を簡単にお書きください。

①主な教材 例：国際学友会日本語学校「進学する人のための数学(1)、(2)」

②指導内容

- (3) 受入れ学生の全体的な印象をお書きください。

☐ とても良い ☐ 良い ☐ 普通 ☐ 悪い ☐ とても悪い ☐ わからない

【感想】

- (4) ご指導された時期の日韓生の日本語力はどうでしたか。

() とても良かった () 良かった () 普通 () 悪かった () とても悪かった () わからない

【感想】

- (5) 専門基礎教育の理解は、どうでしたか。

() とても良かった () 良かった () 普通 () 悪かった () とても悪かった () わからない

【感想】

- (6) 日韓生が次年度に本学工学部に入学する前の予備教育として、国際交流センター（旧留学生センター）での専門基礎教育の学習は、日韓生の学習状況から判断して、今後必要であると思いますか。

() 必要だ () 余り必要ではない () 指導の必要が全くない () わからない

- (7) 専門基礎教育の指導では、特にどのような点に、今後注意・配慮すべきだと思いますか。

- (8) 国際交流センターでの予備教育中の指導内容（日本語指導、生活指導、その他）に対する要望がありましたら、お書きください。また、その他、お気づきの点も、ご記入願います。

* ご協力ありがとうございました。

Ⅲ. 「日韓共同理工系学部留学生事業による留学生（日韓生）への指導アンケート（工学部指導教員）」

- (0) 指導教員（学年担任も含む）となられて、ご指導をされた日韓生の名前をご記入いただけますか。

また、指導教員（大学時、大学院時）、学年担当の別をお書きください。

①日韓生の氏名：（お忘れになった場合は、1, 2, 5, 6期生のどの期生かお書きください。）

②ご担当：() 指導教員（大学）、() 指導教員（大学院）、() 学年担任（ 年度）

- (1) 受入れ学生の全体的な印象をお書きください。

() とても良い () 良い () 普通 () 悪い () とても悪い () わからない

【感想】

- (2) 国際交流センターでは、受入れ初年度時に日韓生に対して、日本語と専門基礎教育の予備教育を行なっておりますが、先生がご指導された時点の日韓生の日本語力、専門基礎教育の理解度はどうでしたか。

①日本語力

() とても良かった () 良かった () 普通 () 悪かった () とても悪かった () わからない

【感想】

②専門基礎教育（理解度）

() とても良かった () 良かった () 普通 () 悪かった () とても悪かった () わからない

【感想】

- (3) 国際交流センター予備教育時期における専門基礎教育の学習について

①化学、物理、数学の専門基礎教育については、工学部入学前、即ち、受入れ初年度に、国際交流センターから現在（元）高校在職の先生にお願いして非常勤講師となっていて、「高校の復習」を中心にご指導をしていただいています。独立行政法人以降その経費等が問題となっておりますが、博士課程の工学部の大学院生に、予備教育の指導を依頼することについては、どう思われますか。

() 賛成 () 反対 () わからない

【理由】

②受入れ初年度の国際交流センター予備教育時期において、今後も専門基礎教育の学習が必要だと思いますか。

() 必要だ () 余り必要ではない () 指導の必要が全くない () わからない

【理由】

③日韓生の1, 2期生の要望もあって、5期生(2004年)以降国際交流センターの予備教育時期に、人文学部と教育学部のご協力によって、日韓生が両学部ネイティブの外国人教師に英会話の授業を聴講させていたいていることをご存知ですか。

() 知っている () 知らない

(4) 受け持たれている科目から見た日韓生の専門基礎教育の成績、単位取得状況は、どうでしたか。

() とても良かった () 良かった () 普通 () 悪かった () とても悪かった () わからない

【感想】

(5) 学習内容、進路、卒業研究について、定期的なご指導をなさっていましたか。

() 学期に1度 () 1ヶ月に1度 () 1週間に1度 () 2、3日に1度 () しなかった

(6) 日韓生の学習面では、どのような点が印象に残りましたか。

(7) ①日韓生の生活面では、どのような点が印象に残りましたか。

②これまで、アパートを借りる際の「保証人」になっていただけないか、という相談を受けられたことがありますか。() はい () いいえ

(8) 韓国人学生は、男子学生の場合、兵役の義務がありますが、進路相談の一環として兵役に関する相談を受けられたことがありますか。() はい () いいえ

【相談内容について】

(9) ①日韓生に就職指導(国内、国外)を行なったことがありますか。②また、その必要はあると思いますか。

① () 就職指導をした。 () 就職指導は特にしなかった。

② () 就職指導の必要はあると思う。 () 就職指導の必要はないと思う。

() 日韓生に就職希望があれば、相談に乗りたいと思う。

(10) その他、日韓生の指導で、苦労や配慮した点はどんな点でしたか。また、日韓生の場合、特にどのような点に、今後も注意・配慮すべきだと思いますか。

(11) 日韓生の指導教員となられて、負担に感じられたことに○をつけてください。

① () 受入れ事業への参加

⑥ () 学生との人間関係

② () 受入れ関連業務の関わり

⑦ () 学生への連絡

(日韓プログラム推進大学フェアへの参加など)

⑧ () 事業に関する情報収集

③ () 学業・進路指導

⑨ () 国際交流センターとの連携

④ () 生活指導

⑩ () 予備教育への関与

⑤ () 住居保障

⑪ () その他

(12) 「日韓共同理工系学部留学生プログラム」へのご意見・ご質問・ご要望がありましたら、ご記入ください。

(13) 国際交流センターに対する要望(日本語指導、生活指導、その他)がありましたら、お書きください。

また、その他、お気づきの点も、ご記入願います。

* ご協力ありがとうございました。

Ⅳ. 日韓理工系学部留学生プログラム・アンケート (今後のプログラム支援に役立てることを目的としています。)

● 国際交流センター (留学生センター) 予備教育時代

1. 韓国にいたとき、どのようにして、このプログラムのことを知りましたか。
① 高校の先生から、② 友人から、③ 親の勧め、④ インターネットから、
⑤ その他 ()
2. 三重大学を、どうして、選びましたか。
① 勉強したい学科があったから。② なぜかわからないが、三重大学に決まってしまった。
③ 自分のレベルに合っていたと思ったから。④ 親の勧めがあった。⑤ 友人の誘いがあった。
⑥ その他 ()
3. ソウルで行なわれる日韓理工系学部留学生プログラムのフェア (合同説明会) のときに、三重大学のブースに行きましたか。(5期生以降の学生)
① 行った。 ② 行かなかった。 ③ 後日三重大学のパンフレットを見た。
4. 来日した当時の国際交流センター (留学生センター) の受入れはどうでしたか。
2期生 :
5. 6期生 :
5. 三重大学で、3期生と4期生の受入れがなかったのは、なぜだと思いますか。
2期生 :
5. 6期生 :
6. 日本語レベル判定試験の結果、レベルに応じてクラスが決まりますが、自分のクラスは適切でしたか。
① 適切だった (よかったと思う)
② 適切ではなかった (よくなかったと思う)
(理由 :)
7. 韓国の慶熙大学から三重大学国際交流センターの予備教育へ移る過程は、日本語の学習上という点から見た場合、順調に進めましたか。
① はい、 ② いいえ (理由 :)
8. 三重大学の予備教育期間の勉強はどうでしたか。
① 役に立った
(良かった点 :)
② 普通
③ 役に立たなかった
(理由 :)
9. 留学生会館、国際女子寮の生活は、どうですか。(どうでしたか。)
① よかった (理由 :)
② 普通
③ よくなかった (理由 :)
10. 国際交流センターの予備教育時代の感想を述べてください。また、今後改善すべきこと、どんな新しいことをしてほしいですか。
2期生 :

5.6 期生：

●三重大学工学部入学以降

11. 日本語の面ではもう問題はありませんか。自分にはさらにどんな点を補う必要がありますか。
12. 指導教員の指導は、どうですか。(どうでしたか。)
- ① よかった ② 普通
- ③ よくない(理由： _____)
13. 現在の専門の勉強はどうですか。どうでしたか。
- ① 役に立つ ・面白い ② 普通・普通
- ③ 役に立たない・面白くない(理由： _____)
14. 工学部入学以降、特に大変だったことについて、具体的に述べてください。

●今後の予定について

15. 兵役はいつ行く予定ですか。(男子学生のみ)
16. 兵役に関する情報は、どこから入手していますか。
- ① 友人から ② 親から ③ インターネットから
- ④ その他(_____)
17. 三重大学・他大学の大学院に進学する予定ですか。
- ① はい ② いいえ ③ 検討中
18. 就職は、どうしたいですか。
- ① 日本国内で少し働きたい。 ② 卒業後、(兵役後)、韓国国内で働きたい。
- ③ 日本以外の外国 ④ 就職は考えていない。
- ⑤ その他(_____)
19. 就職情報について、どのようにして入手したいと考えていますか。
- ① 友人から ② 親から ③ インターネットから ④ 指導教員から
- ⑤ 韓国政府からの日韓プログラム参加者向けの就職情報
- ⑥ その他(_____)
20. これから 10 年の自分の将来の計画を簡単に書いてください。

●日本での生活について

21. 日本、三重県、津市での生活は、どうですか。
22. 三重大学での学生生活全般は、いかがですか。

●日韓理工系学部留学生プログラム全般について

23. このプログラムに参加し、現在の感想を、簡単に述べてください。
24. このプログラムは、当初 10 年の予定でしたが、2010 年以降も続けることを、両政府で確認されました。このプログラムを続けるならば、どのような改善点が必要だと思いますか。

●現在のこと

25. 今、何か心配なこと、不安なこと、があったら、書いてください。その他、書きたいこと。

* ご協力ありがとうございました